

鴨東通信

夏

2015.7 No.98



●日常語のなかの歴史12
まきえ【時絵】

木村法光

●てーたいむ
紫煙は世界をめぐる

鈴木達也

●万博がもたらしたもの3
名古屋とソウルのあいだには……

井上章一

●エッセイ
近世日本の銅

今井典子

水は誰のものか
裸の王様とトマスと職人

小野芳朗

『角倉一族とその時代』刊行にあたって 森 洋久

●リレー連載 世界の中の日本研究20
日本のマンガをめぐる言説

石毛 弓

●史料探訪60
釈迦十六羅漢図

——「苦行」の釈迦像と泉涌寺の宋式儀礼 西谷 功

京都近代の記憶

〔8月刊行予定〕

場所・人・建築

中川理著

▼A5判・一七二頁／本体二、二〇〇円

京都はよく「千年のみやこ」と言われる。確かに平安京ができて千年以上たつ都府である。しかし、平安京の姿そのままの遺構など実はどこにも残されていない。

東京遷都により没落の危機に見舞われ、都市改造や近代建築の導入に積極的に取り組む一方で、まさに生き残りを懸けて「千年のみやこ」を演じてきた街、京都。いまある京都の魅力はいつ、どのように作られたのか? 「歴史都市」の近代化の過程で生まれたさまざまなエピソードを、場所・人・建築をキーワードとして写真とともに綴る。

内 容

- I ■ 近代化の舞台となった岡崎
- II ■ 場所と空間・建築
- III ■ 歴史と空間・建築
- IV ■ 街に寄り添う様子
- V ■ 京都モダニズム
- VI ■ 基督教の文化
- VII ■ 近代を駆け抜けた建築家
- VIII ■ 保存と演出
- IX ■ 京都周辺のまち



京都ハリストス正教会



拡張後の四条通(絵葉書)

なかがわ・おさむ：一九五五年生。京都大学大学院工学研究科博士後期課程修了。京都工芸繊維大学大学院工学研究科教授。

水系都市京都

水インフラと都市拡張

〔8月刊行予定〕

小野芳朗編著

▼A5判・三三〇頁／本体五、四〇〇円

「山紫水明」の地とたたえられる京都は、その美名とは裏腹に灌漑・防火用の表流水の欠乏に悩まされつづけた都市であった。そして琵琶湖疏水こそ、この問題を解決する画期的な事業だった。近代京都の都市史を水量・水質・水利権などに着目して水インフラという視点から論じる一方で、同一水系に属する伏見が一度は独立市制を志しながら京都市へ合併される顛末を明らかにする。

内 容

第I部 防火都市・農業都市の京都

第一章 京都・御所用水の近代化

近世までの京の水支配／琵琶湖疏水工事の目的／明治四年以降の御所用水／琵琶湖疏水竣工後の御所用水

第二章 都市経営における琵琶湖疏水の意義

琵琶湖疏水の開削／琵琶湖疏水建設のための土地収用／鴨川東部における疏水本線沿線の水力利用／庭園と防火

第三章 水道インフラ整備

コレラ流行と祇園祭／第二疏水／御所水道

第II部 大京都への都市拡大と伏見編入

第一章 栄光の伏見

伏見からみた京伏合併／京伏合併理由の定説に関する論点整理ほか

第二章 大京都市構想と大伏見市構想

京都市の都市計画と伏見の位置づけ／編入圧力と独立市制施行／浜田案提示と伏見独立市制／宇治川派流埋立工事問題ほか

第三章 伏見市制の挫折と京都市への編入プロセス

伏見市制の論理／京都府・市の論理

おの・よしろう：一九五七年生。京都大学大学院工学研究科衛生工学専攻修士課程修了。京都工芸繊維大学副学長。

まきごえ【蒔絵】

蒔絵については誰知らぬ者もないかと思うが、さてその嚆矢となるのは何か、となるとなかなか曰く言い難い。

蒔絵という言葉についてはこれまで「金銀銅唐大刀」〔東大寺献物帳〕の記載注記にいう「(前略)

鮫皮把作山形 葛形裁文 鞘上末金鏤作 白皮懸(後略)の「末金鏤」が後世いうところの「蒔絵」と同義語であると明治期末黒川真頼が考証・提言し(『日本漆器種類』『黒川真頼全集』第三、一九一〇年)、大正時代には小野善太郎もこれを支持する(『正倉院の栞』、一九二〇年)。このことはごく近年まで通説となっていた。

ところが二〇〇二年、田川真千子氏が「末金鏤」は名詞ではなく、「鏤」も「作」も

動詞であり、献物帳にいう「鞘上末金鏤作」は「鞘の上に末金もて鏤し作る」と訓み、技法名をいうのではなく、その技法で製作された文様の状態を説明する言葉ではないかという説をたてられたのである(『人間文化研究年報』第一八号、奈良女子大学)。

日常語の歴史 なかの歴史 12

◎日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野から紹介します。

では「蒔絵」の言葉が文献上に現れるのは何時からかとなると、その成立は平安時代前期だとする『竹取物語』に「麗しき屋を造りて漆を塗り蒔絵し」があり、「醍醐天皇御記(延喜御記)」の「三尺蒔絵厨子」(延喜一六・九一六年条)の記述に至る。このように一千百年も遡る平安前期には「蒔絵」

の言葉も確立・普及していたことになる。

さて、周知のごとく蒔絵の技法は、漆液で描いた文様や広い面積に塗りつけた漆が未だ乾かないうちに金や銀の金属粉、乾漆粉等を蒔いてこれを乾固させたものだが、基本的には次の三種類に大別・分類できる。

一は金銀粉で描いた文様に数回漆を塗り重ね、乾固後この文様が現れてくるまで朴炭等の研炭で研ぎ出し、摺漆等の工程を経て仕上げる「研出蒔絵」、文様部分だけを固めた後仕上げる「平蒔絵」、漆や炭粉、錫

粉等で文様を高く盛り上げ、そこに金銀粉等を蒔き立体的な文様に仕上げる「高蒔絵」。現代に伝わる遺品や金属粉の製造技術の向上度等を考慮すれば、先に挙げた技法順に蒔絵技術の進化・変遷が見られるのではないかと史料している。

(木村法光・元宮内庁正倉院事務所保存課長)

■パイプ愛好家の世界

——前著『喫煙伝来史の研究』（一九九九年、小社刊）に続いて、このたび『世界喫煙伝播史』を上梓されます。ご自身、パイプの愛好家であり、多くの貴重な歴史的パイプのコレクターでもあります。

私はパイプに出会うまで、タバコは喫っていませんでした。パイプとの出会いは、一九六三年に大学を出て半導体のメーカーに入社し、海外部門を立ち上げて、入社二年目に初めて行ったヨーロッパのことです。スウェーデンの会社で半導体の信頼性試験について議論をしました。こちらは私と技術者の二人、向こうは一〇人ぐらいいましたが、みんなパイプを喫っているのです。それだけでもプレッシャーですね。その場で私は、先方の試験に対する疑問をぶつけました。そうするとみんな黙ってしまいました。黙ったまま、くわえたパイプからタバコを出して、掃除をして、新しいタバコを詰めて、火を付ける。火は最初二、三回しないと付かないのですけどね。そのあいだじっと待つのです。ああ、あいつ考えてるな、とそういう仕事ですね。そしてようやく「先ほどの質問だが」

ていーたいむ

紫煙は世界をめぐる

すずき たつや
鈴木達也

(国際パイプ・アカデミー理事／日本パイプクラブ連盟名誉会長)

と答えるのです。答えるまでにそれだけを考えた。これはいい道具だと思いました(笑)。コペンハーゲンの空港で三本買ったのがそもそのスタートです。日本ではまだ二〇代でパイプをくわえるなんて考えられなかった頃でした。そのうちに、パイプの好きな連中が銀座で集まってわいわいやっているというのが、新聞の記事に出たのです。銀座に菊水という日本で一番古いタバコ屋があるのですが、そこへ行って聞くと、あそこは推薦人がいないと入れないよと言うのです。しかし頼み込んで、とりあえず、一、二回例会に出てもらってから決めましょう、となり、なんとか日本パイプスモーカーズクラブに入りました。

こういうパイプ愛好家の集まりは、ヨーロッパや海外のあちこちにあります。日本にも、沖縄の那覇市から北海道の北見市まで、現在三一のクラブがあつて、日本パイプクラブ連盟を組織しています。

パイプの愉しみ方の一つとして、長吸い競争というのがあります。これは、同じサイズのパイプとタバコ三グラムを支給されて、五分間でタバコを詰め、その次に一分間で二本のマッチ

で点火します。最初に火を付けると、タバコが盛り上がってきますから、押さえてもう一回火を付ける。そのあとはもう点火できません。それをどれだけ長く喫うかという競技です。世界大会が三年に一回ありまして（現在は四年に一回）、一九七三年のフランス大会に、日本から五人が初めてゲストとして参加したので、一九七六年には世界大会を東京で開催しました。そのころ、勤めていた会社を辞めて、自分の会社を創業しました。

■歴史を世界的な時間軸からみる

パイプを始めて三年目くらいに、パイプや喫煙の歴史を調べようと思い、いろんな本を読んではカードに書き込むというのを始めました。ところがだんだん読んでいくうちに、こりやおかしなことと思うことが多くなってきました。

大家とされている方でも、巷説を検証していなかったり、海外のタネ本をそのまま翻訳して自分の本として出したりしているのがわかってきました。

どうも、通説になっている大前提を、きちんと検証しないで議論することが多いように思います。日本人の論理というのはそういうものが多いです。たとえば、タバコがいつ日本に伝わったかについても、その大前提はヨーロッパの喫煙史なのです。その前提を確かめるというプロセスが、今までの議論には抜けていたと思います。世界的な時間軸をまったく無視したのですね。

私の大学一年のときの英語の教科書がアーノルド・トゥイン

ビーだったのですね。もともと歴史は暗記物だと思っていたのですが、トゥインビーを読んでショックを受けました。彼は歴史をばーっと俯瞰するのですね。日本の歴史学というのは俯瞰がなくて穴を掘っているわけです。横穴をつなればいいのですが、それがないように私にはみえます。

■大司教に直談判

——それにしても、史資料を調べる際のフットワークや人的ネットワークがすごいですね。

幸いなことに本業が、医療器の部品を日本のメーカーに作らせて輸出する仕事でして、それを四〇年やっています。多いときは年に一〇回くらいアメリカやヨーロッパに行っていました。行けば最低二週間は滞在します。各地にパイプを喫う仲間がいますしね。土地のパイプ屋へ顔を出したり、博物館・図書館にも通います。

また、国際パイプ・アカデミーという世界的な学会があります。毎年一〇月に大会があり、今年はベルギー、昨年はドイツのケルン、その前は東欧というように、各地で開催されます。アカデミーの同僚会員の助言と協力に研究の多くをよっています。

スペインの喫煙史を調べるにあたって、一六四二年にローマ教皇ウルバヌス八世が出したタバコ禁止令の原文にあたる必要があります。先行研究では、原文を読んで論じられていないからです。

幸い、私はカトリックの大学を出ていまして、イタリア人の元学長が、偉くなってバチカンの教育省の局長になり、さらに大

司教になられて日本に帰られたのです。教会の人たちは別の呼び方をするのですが、我々は大司教でも先生で済みますから（笑）。「先生実は、これの元になるウルバヌス教皇の出した文書の控えがバチカンの機密文書館にあるのです。これを見たいので、紹介してもらえませんか」と言う、「わざわざ行くことないですよ。あそこ館長は私の部下でしたからそれを取り寄せましょう」となって、すぐにコピーが来ました。当然ラテン語で書いてあります。その読解に苦労して、一年かかりました。A4の一枚くらいの文書ですが。ラテン語もかじることにはかじっていたのです。辞典を並べて、ともかく重要な部分を訳しました。それでは自信が持てませんから、当然教皇文書を専門に読む先輩の研究者にみてもらいました。三か所だけ直されて、あとはいいでしょうとなったのです。

■米大陸からイギリス・世界へ

——喫煙伝播のアウトラインを教えてください。

世界的に喫煙が広まったのは、当初パイプ喫煙が中心です。葉巻は限定的でした。この、パイプと葉巻という喫い方の違いがなぜ生まれたかという点、一番の原因はタバコという植物の種の違いなんです。南米の大部分からメキシコの東岸にいたる地域では、葉が広く、味が柔らかなタバコム種が主流で、これは大きくて巻きやすかった。メキシコ以北から北米大陸東岸のセント・ローレンス河にいたる地帯では、寒冷的な気候には強いが葉が小さ

く辛い味のルステイカ種が主でした。自然発生的に筒を通じて吸うようになるわけです。そういう文化の違いが生まれてきます。パイプが喫煙風習として世界に広まったのは、一六世紀の後半からで、イギリスが最初でした。ウォルター・ローリー卿にいろいろな伝説があつて、彼が宮廷で広めたということになっていきます。それはあながち嘘ではないのですが、そんな簡単なものではありませんでした。彼が広める前に既にある程度広まっていたからね。テレビがやる歴史ドラマみたいなもので、事実ないものを入れていくというのが、歴史の本にもたくさん見られますね。そうやって伝説化されていったのです。

ポルトガルとスペインの船員たちは、巻いたタバコを喫っていました。ところがこの葉巻の原形はスペインで広がりを見せるのは一八世紀の後半からで、世界的には一九世紀に入るまで普及しませんでした。パイプの方は、一六世紀の終わりから始まっているわけです。

■オランダへ

パイプはイギリスの次はオランダに伝わります。オランダとイギリスの関係は密接です。ずつとあとですが、一六八六年のイギリスの名誉革命によって、オランダ総督がイギリスの王・ウィリアム三世になります。また、イギリスは、ヘンリー八世（在位一五〇九〜一五四七）が英国教会の基礎を作り、エリザベス一世（在位一五五八〜一六〇三）がそれをさらに強めたのですが、ローマ

なり、カトリック王国であるスペインに対抗する勢力として、オランダとイギリスはたびたび一緒に行動しているのです。オランダ北部がスペインに対する独立戦争を戦った時には、エリザベスが援軍を送ったりしています。

さらに、英国教会に対抗する急進派がでてきたわけですからピューリタンです。その兆しが始めると、やはり国内でいろいろ悶着が起こって、パイプを作る職人がオランダに渡ります。また、エリザベス一世が亡くなつて、タバコ嫌いのジェイムズ一世がスコットランドからイギリスの王様（在位一六〇三―二五）になり、そのせいで職人がオランダに流れたというケースもあるのです。先ほどの援軍が休戦で職を失い、パイプ作りに転じたりと、パイプ職人の移住には複数の動機が重なっていたのです。

パイプの伝播は、主として港町を通じて始まるのです。ロンドンから、パイプ作りとタバコが最初にアムステルダムに入ります。当然港はロッテルダムや、エンクハウゼンなど、のちに東インド会社の拠点となる街では、船員たちから船員たちへ伝わりま

■素焼きのクレイパイプ

このころにオランダで作られたのは、イギリスで作られたクレイパイプという、白粘土を焼いて作ったパイプです。素焼きですから非常にもろく、すぐ折れてしまうのです。一年間に最低一〇本は必要でした。それでパイプが普及してくると、作る方が間に

合わなくなり、オランダの各地に工房ができます。一工房に二、三人から多くて数十人程度の職人がいました。ハウダ（英語読みではゴード）では、パイプ工房のギルドが一七世紀の半ばに作られて、質のよいパイプを作り出します。ハウダ製のパイプは品質がいいというところで高く売れました。成形した後、焼く前に表面を磨くのですが、瑪瑙やガラスの棒で磨きます。それで艶を持たせて上級品として売っていたわけです。オランダはハウダに生産が集中することで、海外へも輸出するようになりました。

日本にはオランダ商人の自家用としてずいぶんクレイパイプが入っています。長崎出島のオランダ商館跡の発掘調査でも大量に出土していて、長崎市教育委員会に頼まれて、国際パイプ・アカデミーおよびオランダ・パイプ研究会会員のB・ファン・デア・リンゲンさんと一緒に、類別して年代の特定をするという作業をやりました。調査した対象は一万点ぐらいで、まだ発掘は続いています。

■日本への伝来

イギリスからオランダへ来たパイプ伝播の、次はどこかというところ、日本です。私はよく講演の時に、日本は世界で三番目に早いパイプ喫煙国だと言っています。これは、ヨーロッパでのパイプ喫煙がイギリス・オランダによって広まり始める前に、日本でのパイプ（キセル）喫煙がスタートしているからです。キセルというのは、構造的にはパイプですからね。タバコの処理の仕方が違

います。

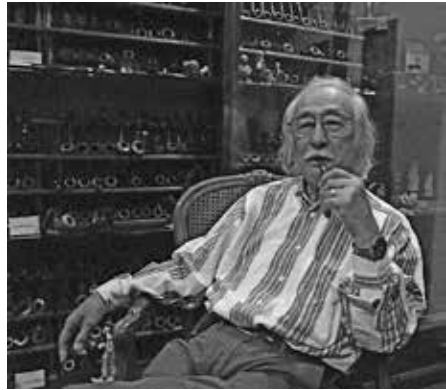
日本にタバコ・喫煙がいつ・どのように伝来したか、これには議論があります。前著でも論証しましたが、少し詰めが甘いところがありました。それを今回の本では徹底的に調べ直し、反論に答えています。

タバコ伝来について、今日でも流布するのは慶長一〇年（一六〇五）説です。私は、日本にタバコがもたらされた時期は、慶長一〇年よりもっと早いと考えています。そのことを論証する有用な史料は、六点あります。

一番早いのは、新潟県出雲崎町の良寛記念館が所蔵する『越後国三嶋郡出雲崎村御水帳』という、天正四年（一五七六）の検地帳です。ここに「たはこや 吉左工門」という記述が出てきます。早くから知られた史料ですが、近年では、タバコ伝来時期としては早すぎるとする説や、この『御水帳』の真贋を問う論議が出て、あまりとりあげられることがなくなりました。

しかし、早すぎるといふ説は、慶長年間の伝来説を支持することによるものですし、真贋を問う議論の多くは、もともとなる史料の一部のみをとりあげることで解釈に齟齬が生じ、大前提の誤りや予断が異なる結論を導いたものなのです。

次に早いのは、相国寺の塔頭鹿苑院の院主・有節瑞保が記した「日渉記」という記録です。文禄二年（一五九三）七月九日条に、「烟



草」の記述があります。しかしこの「烟草」は「烟景」と読むのが正しいという説が一九三八年に出て、以後それが定説になりつつありました。

この「日渉記」という記録は、『鹿苑日録』という史料の一部で、東京大学史料編纂所が謄写本（写本）を所蔵しています。一部分だけ原本が東大にありましたが、最近になって、相国寺にも原本の一部があることがわかりました。私はそれら一つ一つを調べ上げ、謄写本ではこう書いてあった、同じ文字を同じ筆で別のところにはこう書いてあった、ここは絶対「景」とは読めないところにこの言葉は出てこない、というのを図にしましたら、間違いなく「草」だというのが、わかったのです。ずいぶん時間もお金もかかりましたが（笑）。

島根県の石見鉾山の周辺の江津市で、古い庄屋の蔵を開けてみると文書が一六、〇〇〇点ほどあったと日本経済新聞で読んだときは、確かめてみたら検地帳にタバコが出てくると言われましたので、すぐにすっ飛んでいきました。慶長七年（一六〇二）の検地帳に「たはこ 弥三郎」とあります。

こんなふうに、史料一つ一つを、実際原本にあたり、その背景を調べ上げて、論証を積み上げていきました。

いずれにしても一五九三年には、日本では既にタバコがออกมาつていたということなのです。

伝来初期の喫煙は、パイプではなく巻いたタバコで、ポルトガルからの船員・商人によって持ち込まれたものでした。これも世界的な時間軸をみていくとわかるのです。

■スペインは嗅ぎタバコ

キセルについては、私は前著で、オランダの金属パイプを模したものであろうと書いたのですが、キセルは中国から入ってきたと固執する人がいるのです。しかし、中国から入っているのは理屈から言ってもありません。中国の古文獻に、パイプ喫煙がルソン島から中国に入ったと書いてあるのが根拠なのですが、ルソン島から入ったということはありえないのです。

というのは、ルソン島は、スペインが支配していましたが、スペインでパイプを吸うようになるのは、一九世紀の後半です。スペインではタバコをどうしていたかという点、スナッフというタバコの粉を鼻からいれる方法、嗅ぎタバコです。巻いたタバコを船員たちが喫っていたのは記録としては見られますが、本国では、王室や貴族たちが、あのくさいのは悪魔の仕業だといって、広まることはなかったのです。薬としての粉のスナッフが、最初に広まりました。一六二〇年に、セビリアに旧世界で初めてのタバコ工場ができます。そこで作られたのは粉タバコです。あそこはオレンジの産地ですから、オレンジの香り付けをしたりしていました。嗅ぎタバコはルソン島から中国へも伝わって、鼻煙壺びえんこという、粉タバコを入れる容器を作るようになり、ヨーロッパへ輸

出していたのです。

■時間軸で繋いだ円が描ける

今回の本では、アジアで最も早く始まったパイプ喫煙であるキセルが、アジア諸地域の喫煙伝播にいかに関与したかについても、とりあげています。中国・朝鮮・ヴェトナム・タイ・カンボジア・フィリピンなどです。キセルによる喫煙の伝播は、こうした東アジア・東南アジアばかりでなく、東シベリア、南・西シベリア、さらにアラスカと、極めて広範な地域におよんでいたことが明らかになりました。

イギリスへ喫煙が伝わってから二〇〇年で、パイプ喫煙は日本を経由して世界一周を達成したことになります。

そのほかにも、オランダから北欧を含むヨーロッパへの伝播や、イスラム社会と水パイプの起源・伝播など、世界中の喫煙伝播を追いました。やたらに広げすぎたような感じもするのですが、必然的に広がってしまったのです。本当は南アフリカのことまで書くつもりはなかったのですが、日本に来るのにアフリカを通過してきましたからね。

あちこち突っ込んでいって、それを時間軸でずっと繋いでくるとずっと円が描けるということです。完全に繋がったかどうかは定かではありませんが、だいたい絵が見えてきたなというところですよ。

(二〇一五年五月二三日 於…著者宅)

万博がもたらしたものの(第3回)

名古屋とソウルのあいだには……

井上章一

金のシャチホコ、いわゆる金鯢は、名古屋を代表する街のシンボルになっている。名古屋の天守閣で、頂部の両端にそえられ、城の輪奐をきわだたせてきた。あの金鯢がミニチュア化、あるいはマスコット化された姿で、街中にあふれている。

マンホールの蓋、市役所職員のバッジ、東名高速道路の料金所……等々。なかでも、私がおどろかされたのは、守山にある陸上自衛隊の第一四師団司令部である。

ここでは、正門の左右へ配された門柱の上に、一対の金鯢がのせられていた。地面のパイプにも、シャチの図柄がえがかれていた。自衛隊員の名刺にもシャチ印。そのいっぽうで、日の丸はほとんど見かけない。めだっていたのは、圧倒的にシャチのほうであった。この自衛隊は国防意識より郷土防衛精神のほうが強いのかと、一瞬思ったしだいである。

博覧会場で名古屋館や愛知館をたてるさいにも、シャチのマークはしばしば強調された。パビリオンじたいも、名古屋城を簡略化させたようなそれが、定番となっている。今はそうでもないが、

二〇世紀のなかごろまでは、このやり方が踏襲されてきた。尾張名古屋は城でもつと、俗に言う。その城郭像を、博覧会では郷里の造形として、ながらくうちだしてきた。城とシャチこそが、他府県の人びとにも強くうったえかけると、信じられてきたのである。

こんどは、国際的な規模でひらかれる万国博覧会に、目をむけよう。周知のように、日本国は一八六二年のパリ万博以後、ほぼ毎回このもおしに参加した。そして、そのつど、伝統的な日本建築像を、日本館の意匠にとりいれている。神社、寺院、城郭などの形で、日本国が紹介される施設の外観を、ととのえてきた。あるいは、茶室なども併設して。

西洋人のいづくエキゾチックな日本像に、あわせたというところか。やっていることは、名古屋館、愛知館が国内博でつづけてきた方法と、そうちがわかない。どちらも、伝統的な建築の形にこだわることで、自らをきわだたせようとした。そして、日本館を古建築風によそわせるやり方も、一九六〇年代までもたれて

いる。

世界のなかの日本は、日本のなかの名古屋であった。国内博で名古屋が見せたかまへは、万国博で日本が演じたそれにほかならない。あるいは、名古屋こそが、国際社会における日本の縮図であると言ふべきか。

海外の博覧会で、日本館は異国情緒をかきたてるようにいともまれたと、今書いた。しかし、これには例外もある。東アジアの旧植民地でもよおされた博覧会だと、話はちがってくる。日本館はかならずしも、寺社城郭風になっていない。西洋風、あるいは近代的と言つていい姿になるのが、ふつうであった。

その典型例が、一九二九年の施政二十年記念朝鮮博覧会にうか



日本館をしめすポスター（ニューヨーク博・一九三九年）

（吉田光邦編『図説万国博覧会史一八五一—一九四二
思文閣出版、一九八五年』）

がえる。その名がしめすように、この年大日本帝国は朝鮮統治の二十周年目を、むかえていた。それをことほぎ、当時の京城（現ソウル）で、博覧会を開催するにいたつてゐる。

主会場には、朝鮮総督府の裏側、旧景福宮の跡地をあててゐた。朝鮮の物産をならべる施設は、みな伝統的な民族様式をまわされてゐる。大日本帝国がたてた総督府庁舎の近代的なかまへとは、いちじるしい対照をなしていた。近代化に成功した日本と、伝統的な姿にとどまる朝鮮。この対比が、そこにはうつつしだされていたのである。

欧米では、古めかしい日本の姿で、欧米人の心にくいこもうとした。だが、東アジアでは、欧米風になりました姿を、現地の人びとに見せつけようとする。朝鮮博は、そんな大日本帝国のせない姿勢を、あらわしている。

じつは、愛知県もこの博覧会へは、積極的にかかわつてゐた。愛知県館もたてている。しかし、この時は名古屋城とシャチにこだわるそれまでの常套を、かえりみなかった。京城の博覧会では名古屋らしさを見せずに、近代的なパビリオンをこしらえてゐる。

欧米へいくと日本の伝統をちらつかせるが、東アジアでは近代人であろうとする。そんな日本の知識人は、今でもけっこういるだろう。そんな人びとの原像を、私は大日本帝国時代の日本館に読みとりたく思つてゐる。

（国際日本文化研究センター教授）

近世日本の銅

拙著『近世日本の銅と大坂銅商人』（思文閣出版、二〇一五年）は、大坂銅商人の動向を軸にして江戸時代の銅の通史をまとめたものである。

日本はかつて銅資源が豊富で、第一次大戦までは銅の輸出国であった。現在国内の銅鉱山は閉山しているが、技術は発展を続け、外国産の鉱石を採掘・製錬する銅産業は日本産業の一角を占めている。江戸時代は繁栄期で、一七世紀末・一八世紀初頭の最盛期には年産一〇〇万斤（六〇〇〇トン）、一時的には世界一とされたのち、幕末までに三分の一程度にまで漸減し、明治の近代化を迎えた。日本銅の世界史的位置づけは、住友史料館編『住友の歴史』上巻（思文閣出版、二〇一三年）に、多く取り上げられている。拙著と『住友の歴史』とは銅の通史として相互に参考になる部分がある。

拙著では、まず大坂銅商人の業態を考察し、発展の推進力の所在からみて大坂の銅商人社会の主導権が「銅吹屋」から「銅仲買」へと推移したこと、ついで大坂銅商人と長崎銅貿易の関係を検討し、はじめ輸出の荷主であった大坂銅商人がのち荷主から退くと

いう変遷を明らかにした。また国内向けの地売銅市場の動向を考察し、銅・亜鉛合金である真鍮産業の発展と古銅（銅スクラップ）流通の活発化を検出した。また銅の統制機関である銅座と銅商人との関係とその変遷を考察した。

拙著で判明した成果をもとにして、今後解明が期待される研究の方向を考えてみたい。それは、①大坂銅商人の業態・人数など、②銅山の山元の実態、③幕府の銅政策、④会所貿易の新たな定義や始期を含めた会所貿易以降の長崎貿易、である。

拙著では、大坂銅商人の業種を、1銅屋、2銅吹屋、3銅問屋、4銅仲買、5銅細工人、6古銅取扱業者、7真鍮地銅屋・真鍮吹職に分類し、これに属する二五五人の銅商人で住所が判明する人々の所在が、大坂三郷とそれに近接する町場であることを確認し、居住町別の一覧を作成した。

この人数は、住所が判明する経営主の人数である。江戸時代を通じて大坂銅商人の人数がどの程度であったのかは、今後の研究課題であるが、小売金物商を含めると一〇〇〇人程度ではなかったであろうか。そのなかで銅吹屋は規模の大きい業種で、抱えて

今井典子

いる職人の人数は銅吹屋仲間全体で、最盛期の一八世紀初頭は推定二〇〇〇人程度、幕末は三百数十人であった。

産銅高の推移は前述のとおり、最盛期の年産一〇〇〇万斤から漸減して幕末に三〇〇万斤台で、途中に若干の上下があった。銅山の数は正確には不明であるが、大銅山のほかに小規模・再開発・短期稼行などの形態の銅山が相当あったと考えられ、その実態はまったく今後の研究課題である。

拙著では享保・元文期（一七一六―四一）に、銅山の山元が幕府に対して積極的に値上げを要求しそれを実現したこと、また市場や銅座に対する値上げ要求と実現はそれ以外の時期にもあったことを実証した。通説では山元は、市価より大幅に安い銅値段を幕府から強いられていたとしており、今後、幕府による銅政策の根本的な見直しが必要になった。

従来この通説に一定の説得力があったのは、産銅が減少傾向を示したこと、山元から経営の苦しさを訴える言説があったからである。そこで、山元の経営実態の解明、とくに鉱床の状況を踏まえたそれが、今後の重要な研究課題となる。

山元の銅値段が上昇するいっぽう、銅貿易では輸出値段が引き下げられ、銅の輸出事業は赤字に転換したが、拙著でその経緯の大筋を、表面的には解明した。はじめ大坂銅商人が輸出の荷主であった時期は、外国商人と毎年値段を交渉し輸出はもちろん黒字であった。大坂銅商人が荷主から退く時期に、山元の値上げ攻勢と通貨の変動（改鑄）、一般物価の変動が同時に起こり、これら

が絡み合って赤字になった。銅輸出値段は半減され（二〇〇斤につき唐人向け六七匁七五、のち一一五匁、オランダ向け六一匁七五）固定された。拙著では銅値段に即してその経緯を追跡した。長崎貿易の研究史には、糸割符制度・市法貨物商売法・定高制・正徳新例などについて豊富な蓄積があるが、長崎会所（長崎の町が運営）の会所貿易を含めた通史がなく、新しい通史が必要かつ期待される。

その場合に基本事項として踏まえる必要があるのは、正徳五年（一七一五）まで長崎は銅貿易の輸出荷主ではなかったことである。それまでの荷主は時代順に銅屋・元禄銅座・大坂銅吹屋仲間、享保元々六年（一七一六―二一）は幕府勘定所、同七年（一二二）になってやっと長崎会所が荷主となったことである。それを踏まえて、銅の赤字輸出に対処する制度がいかに構築されたかにつき、拙著ではその裏側に元文銅座があったことと、その役割のいくつかを提示した。その全貌と歴史的評価を含めて長崎貿易史の新たな研究が期待されるのである。

その貿易制度は端的にいうと、山元の銅値段を引き上げる制度を前提にして、鎖国下の幕府・長崎と輸出依存の山元のために長崎貿易を維持する制度だったのではなからうか。享保・元文期前後の社会変動を経たのちにこのような貿易制度が確立し幕末まで存続したことが確認されるなら、江戸時代史は再考されるべきであらう。

水は誰のものか

今から三五年前、田村喜子著『京都インクライン物語』（新潮社、一九八二年）が上梓され、それをもとに土木学会が田辺朔郎や琵琶湖疏水建設を、後世を見通した偉大な大工事と顕彰した。筆者は当時駆け出しの研究者ながら、単に偉大と持ち上げるのではなく、ものの歴史には多様な側面もあるうと考え、衛生と疏水工事による水道の関連を追ってみた。これが筆者の琵琶湖疏水研究の始まりであった。

それから二五年たち、御所用水の跡が相国寺境内に遺されていることが「発見」されたことから、再び京都市内の用水の研究がはじまった。そのニュースが京都新聞に掲載されると（平成二一年一月二〇日朝刊）、鞍馬口通にある真宗本願寺派明光寺から、「うちの境内に御所用水の跡がある」と連絡が入ってきた。それらを資料的につなぎ合わせていくうちに、御所用水と疏水、そして水道と、京都盆地の水系研究に傾倒することとなった。

さて水の都市史というと、海辺の都市であるとか、河川や運河と都市の関係をあつかう研究が目される。しかしながら、わたしがいうのは水を誰が使うのか、もつという都市の水は誰のものか、誰が支配し、誰に使わせたのかという視点から都市の成立と経営をみていくものである。

小^お野^の芳^{よし}朗^{ろう}

明治維新まで京都盆地の水は賀茂別雷神神社の支配下にあった、つまり水は上賀茂神社のものであった、と橋本政宣は明らかにしている（『賀茂別雷神神社と賀茂川』『上賀茂のより・やしろ・まつり』思文閣出版、二〇〇六年）。盆地の山裾に住んだ先住民とその神が農業生産の源である河川水を支配していた。農耕の土地も神社が所有し、支配した水を灌漑し、耕作民が田畑からあがる生産物を上納した。耕作民は上賀茂神社の水を分けられ、それを使用する権利、すなわち水利権を持っていた。

七九四年、平安京が造営されるが、水という視点で見ると京都の上賀茂・下鴨神社の下流にあった。御所は時代とともにその位置を東に移し、それとともに上京、下京の町も東に移り、秀吉の時代に現在の京都の原型ができあがるが、賀茂川から分水される用水の位置が上賀茂神社の下流であることに変わりはない。これは京都という都市が良好な地下水の上に成立しているという事実とは別の問題である。地下水は飲料水、表流水は灌漑用水、生

活用水、防火用水である。御所の御庭の水もこの用水の下流にあった。だから旱魃期には上流の農耕用が優先され、しばしば御所まで水が来ない事態が起きた。

こうして京都の河川水は平安京周辺の農村で灌漑用として消費され、米や京野菜が生産された。農村は、京都という人口の集中する都市から排泄される尿を得て、それを良好な窒素、リンの肥料源とした。つまり、ある時期まで京都と周辺農村は、水は農村が優先したものの、消費と生産、肥料の供給と食料の成長という絶妙なフードバランスにあった。

しかしながら、水量的には市内および、御所の生活用水、防火用水、御庭の水不足は慢性的なものであった。京都は水不足の都市であった。これを抜本的に解決するインフラが琵琶湖疏水であった。疏水の建設理由、意義は、明治一六年に書かれた起工趣意書をもとに、効果や結果についてさまざまに語られることが多いが、趣意書との比較において効用を議論する前に、近世以前の賀茂川・高野川水系のみに頼る巨大都市の抱える慢性的水不足の事実や、京都盆地の水量の収支を考えれば、まったく異なる水系、すなわち琵琶湖に由来する疏水建設そのものが目的であったと考えるのが自然ではないだろうか。水量不足の解決こそ疏水の第一目的である。その使途としてが、明治一六年時点では、水を水車動力にも使い、灌漑や防火の用にも供した。疏水の目的は時代とともに変化した。しかし、水量の確保の根本的解決がなされたことが最大の効用である。

竣工時より、この目的に沿って、灌漑用の水量は無料で愛宕郡の農村に配布された。これら農村は平安京以前から有する賀茂川・高野川水系の慣行水利権を有していた。慣行であるから、それを補填し、強化する目的の疏水の水が無料提供なのは考えてみれば当然である。事実、疏水事務所の記録によると有料で使用料を徴収したのは、水力発電用、水車動力使用料、舟運通行料、防火用水（を名目とした庭園用水）などであった。灌漑の視点からは琵琶湖疏水はまことに公共工事であったといつてよい。

それでは、この疏水によって、京都の水不足は解決したのだろうか。大正末期から昭和にかけて周辺農村は区画整理によって郊外住宅化するが、張り巡らされた灌漑用水はどうなったのか。大正元年の第二疏水の建設を契機に京都市は水道事業をはじめが、これは使用が有料である。賀茂川、疏水と異なる水系の交错によって京都の水は誰のものになっていくのか。こうした問いに応えようとしたのが拙著『水系都市京都——水インフラと都市拡張』である。

現在、日常生活で琵琶湖から水が蛇口まで来ているという実感はない、あるいは考えたことがない、というのが大方の京都市民ではないだろうか。そして蛇口から排水溝までの三〇センチの水が落ちて排水口に消えていく。その排水口の先に何があるのかを意識することもないだろう。拙著はそうした現代と将来の水利用の構造へも問題を投げかけている。

裸の王様とトマスと職人

——『角倉一族とその時代』刊行にあたって

森^{もり} 洋^{ひろ} 久^{ひさ}

アンデルセンの童話「皇帝の新しい服」〔『アンデルセン童話集』荒俣宏訳、新書館〕は、服の大好きな見栄っ張りの皇帝が二人のさぎ師にだまされる「裸の王様」で知られる話である。さぎ師たちの、この服は「おろか者には見えない」という触れ込みが皇帝の見栄に拍車をかけ、最後には公衆の面前を裸で行幸するはめになる。側近も大衆も自分がおろか者であると思われたくないがために、大勢に迎合するのだが、一人の子どもが本当のことをいってしまふ。物語は、子どもの言葉が広がるなか、皇帝はその中を何事もなかったかのように行進して終わる。読者は「見栄っ張りの皇帝陛下よ、ざまあみやがれ」と思うにちがいない。

しかし、この物語では、皇帝は始めから見栄っ張りであり、さぎ師は始めからさぎ師である。作者は、皇帝を「新しい服を着てみんなに見せびらかすという目的がなければ、へなにごとく」ちつとも気がすすまなかった」(へ内は筆者追加)とその性格を誇張する。これによって、まふまふと読者の判断能力はリセットされてしまふのだ。

この子どもはその後どうなったのだろうか。極刑に処せられ、

実際の世の中は何事もなかったかのごとく嘘がまかり通る、というのが現実かもしれない。「作者」のいない実態世界では、子どもは本当におろか者だったということでも幕を閉じる。

もう一つ興味深い物語を紹介しよう。「聖なる使徒トマスの行伝」〔『聖書外典偽典7』教文館〕は、紀元三世紀ごろにシリア語地域で成立したと考えられる物語である。グノーシス主義の影響をうけ、聖書の正典とはならなかった物語である。キリストの使徒トマスは彼の意に反し、有能な大工としてインドの商人アパネスに売り飛ばされる。しかしトマスは、それが主の意図であることを悟り、洪々インドのダンダフォロス王に仕えることになる。立派な宮殿を建てるために、王は潤沢な資金を提供するが、トマスはいっそうに宮殿を建てる気配がなく、日夜布教に奔走していた。目的とは違うことに資金を使い果たしたことを王は知り、トマスを投獄してしまう。

ところがあるとき、王の兄弟ガドが重い病に罹り、生死の境をさまようことになる。彼が天国の入り口まで行ったときに、立派な宮殿を目の当たりにする。これがトマスが建てた王のための宮

殿であり、多くの人が幸せになっていることを知りガドは目覚める。この奇跡によりガドも王も、世俗にとらわれ真実の宮殿を見ることが出来なかった愚かさを悟り、悔い改めるのである。トマスがさぎ師、ダンダフォロス王、ガドが子どもと、その役割はまったく対照的に重なるのが面白い。

我々が歴史的事件についてのさまざまな主張を前にするとき、いつもこの二つの物語の狭間で板挟みとなる。つまり、見えないものを見えるという皇帝か、それとも、見えるものを見えないというダンダフォロス王か。

角倉一族のゆかりの地を訪ねると、その功績を讀える石碑に出会う。また、明治期の教育的読み物にはしばしば角倉の活躍を紹介したものが現れる。運河の開削や、運搬事業の開発といった多様な活躍が讀えられている。だが、その中のいくつかは、学術的にたどっていくと史資料が尽き、どこかで「見えなく」なる。角倉一族の功績が大きいだけに、なかには伝説的なものも混在するのである。目覚ましい成果は、どのような人びとが、どのように造り、管理、保全し、これらを伝えてきたのか、謎も多いのだ。

角倉一族の仕事は、与一や素庵などの名が出てくることがあっても、多くの職人たちのチームワークによる工房的な性格が強い。角倉の栄えた近世という時代の一つの特徴ともいえるが、職人たちは寡黙であり、その活動の実態は見えにくい。

ものをつくる仕事にはある種の職人的勘というものがある。技は体に焼き付けられている。ものごとの手順は、論理的に構築さ

れた、というよりも、長年の、時には師匠のそのさきの師匠から続く歴代の進化論的なプロセスによって形成されたともいうような、連綿とした方法論の上に成り立っている。なぜ歩く時には右足を出し左足を出すのか、そんなことに説明をつけていたらすぐさま歩けなくなってしまうように、その技がなぜそうなのか言葉にすることはできない。だが、その方法が唯一、確実に目的を達成する道であることを直感的に知っている。

研ぎ澄まされた感覚の職人は、石垣や杭を見れば、それはなにかを直感的に理解できる。理解というよりは、ものが、語りはじめるのである。しかし直感を持たない誰かにこのことを語ろうとすると、その誰かにとっては「裸」にしか見えない。したがって、職人たちは寡黙になるのである。彼らは言葉を信じず、唯一、身体が作り出す感覚の結晶のみを後世に残そうとする。

「見えない」ものをいかにして見るか。一つの答えは、現代の職人たちである。歴史家のみならず、船頭、石工、工学系研究者、さまざまな職人たちの感覚によって「見えない」ものの輪郭へ迫ることである。こうして、角倉一族の系図を見ると、その名前と名前の間に、見えない人びとの姿が見えてくる。一族を支え、その仕事を発展させた多くの人びともまた角倉一族なのではないか。

(国際日本文化研究センター准教授)

日本のマンガをめぐる言説

石^{いし} 毛^げ 弓^{ゆみ}

日本は「マンガ大国」を自認しているし、たしかにマンガに関連する言説は巷にあふれている。しかし、じつは日本人が「マンガ」というとき、往々にしてその対象からぬけおちているものがあつた。それがなにかといえは、海外で発行されたマンガだ。だが、たとえば批評についてみてゆけば昔からそうだったわけではなく、アメリカ合衆国やヨーロッパの動向を踏まえたうえで論じられていた時代もあつた。

「世界」をキーワードにマンガにかんする言説をながめると、その変遷がみえてくる。この考えを基に、日本のマンガ論における海外という視点について簡単に追ってみよう。なお「マンガ」に類する語は国や地域によって固有の名称が使用される場合もあるが、便宜上すべて「マンガ」に統一する。

最初に、ここであつかう「マンガ」の定義を示したい。日本ではその起源を鳥獣戯画までさかのぼることもあるが、今回は「コマが連続し、セリフが画面内のフキダシに収められている」という近代マンガの基準にしたがおう。この場合、始まりはアメリカ合衆国の新聞マンガ（一八九六年）、もしくはスイスのロドルフ・

テプフェール（一七九九～一八四六年）が台頭した一九世紀半ばから後半に求められるのが一般的だ。日本では、まず横浜居住のチャールズ・ワークマンが「ジャパン・パンチ」（一八六二年）を創刊し、のち日本人によるマンガ雑誌が複数発行され、大正時代にはコマやフキダシのある作品が定着するようになる。

このような流れから日本の近代マンガの黎明期には、マンガの研究や批評にとつて欧米との連関は当然のこととして意識されていただろう。この理解は、時代をずっと下った一九七〇年代あたりまでは持続していたようにみえる。たとえば鶴見俊輔はあるエッセイで、北米では複数人が作業を分担してチームとしてマンガを制作することがふつうであり、だからこそ半世紀以上にわたる連載が可能になっていると述べる。物語マンガは本来集団の芸術だとする彼は、日本でもそういったかたちの制作スタイルが誕生することを期待した。ここから、彼にとつて日本の手法を海外の手法と比較するのがふつうの発想だったことがみてとれる。おなじ時代の佐藤忠男や尾崎秀樹、石子順造らの著作にも、同様に海外のマンガへの言及が見出される。

マンガにまつわる言説から国外への視点がうすれるのは、先に挙げた論者たちより後の世代からだ。その大きな要因のひとつに、先行する世代の批評が次の世代にとって、外側からマンガをながめたようなズレや違和感をもつてとらえられたことが挙げられるだろう。生まれたときからマンガにかこまれ、また子ども時代にマンガ雑誌の創刊が相次いだ世代にとって、マンガとは何であるのかは、わざわざ検証するものではなく、自分が感じて仲間同士で語るものだった。もちろんすべての論者がおなじ論調だったわけではないが、マンガの内側から語るマンガ論としてのいわゆる「ぼくら語り」が、村上知彦や米澤嘉博、中島梓などによってポピュラーになっていく。このとき日本マンガの起点としての海外マンガという視点は、前の世代に顕著なアカデミズムでありなじまないものとされたのだろう。後年、夏目房之介が反省をこめて述懐するように、先行世代への反発から反対の方向に大きく振れたのがこの時代の語り口の特徴だといえる。

では、現在も日本のマンガ研究はおなじ状況かといえばそうではない。とくに一九九〇年代後半以降、国際的な交流がさかんになっている。それより以前から国を超えたマンガ家同士の交流はあったものの、その枠におさまらない多様な広がりが見られるようになった。研究という分野でも、マンガ関連の国際的なサミットやシンポジウム、講演会が開催されるなどさまざまな活動が営まれている。手前味噌になるが、筆者の勤務する大学でも二〇一四年に主に日仏のマンガにかんするシンポジウムが開催さ

れ、その成果は『日仏マンガの交流——ヒストリー・アダプテーション・クリエーション——』として思文閣出版から刊行された。最後に、これらの流れが海外からどう評価されているのかをみてみよう。第一回国際学術会議「世界のコミックスとコミックスの世界——グローバルなマンガ研究の可能性を開くために——」（二〇〇九年）の報告書には、日本におけるマンガ研究が主として国内の作品に焦点を当ててきたことへの批判が多くみられる。日本のマンガにたいする海外の研究は、フレデリック・Ｌ・シヨットによる“Manga! Manga! : The World of Japanese Comics”（一九八三年）を嚆矢として散見される一方、日本語による海外のマンガ論は、存在するものの数において多いとはいえなかった。また一般の興味関心レベルでいうと、筆者の体験になるがイギリスに留学していた二〇〇〇年代前半、田舎の大学町にある中規模の書店に日本のマンガ本はなかった。だが二〇〇〇年代後半に再訪したとき、英訳された日本のマンガ本が小さな本棚の数を占めていて驚かされた。しかし日本の一般の書店では、海外のマンガ本にコーナーがあたえられることはまだ稀だろう。

こういった事態の転換がいま始まっている。文化横断による国際的なマンガ研究は、まさに躍動を開始したところだといえる。国や地域を超えた議論が今後ますます活発に交わされることをぜひに望み、またおおいに期待している。

（大手前大学現代社会学部准教授）

史料

探訪

60

釈迦十六羅漢図

「苦行」の釈迦像と泉涌寺の宋式儀礼

西にし谷たに功いさお

(泉涌寺宝物館 学芸員)

一般的な「仏伝」に従えば、釈迦は悟りを得るために雪山に入り、断食などの厳しい修行をおこなったという。その壮絶な修行のさまは、バキスタン・シクリ出土の「苦行の釈迦」像（クシャー

ン時代、ラホール博物館蔵）に代表される。六年後、苦行のみでは悟りを得られないと考え、雪山を出た。中国南宋時代の作例が残る「出山釈迦」は、有髭の痩せこけた体軀表現、禅僧の画賛などから、この場面を描いたとされる。ここでとりあげる「苦行」の釈迦像は、この二場面をさす。

従来の見解では、両場面は「苦行では悟りを得られない」という「仏伝」に基づき、否定的な解釈をされることが多い。しかし、こうした主題が、仏像や仏画という礼拝対象として寺院に安置された事実留意すると、僧侶の仏道生活においていかなる宗教的意義を持ったと考えられるのか。

こうした疑問に新視座を与える仏画が泉涌寺せんいうじに所蔵されている。泉涌寺は、嘉祿二年（一二二六）、鎌倉時代初期の入宋僧・我禅房俊苒がぜんぼうしゆんじょう（一一六六—一二二七）が創建した。中世日本において、南宋仏教体験僧による寺院創建は、従来の顕密諸宗とは異質

の、宋式の年中行事に則る寺院生活や仏道の実践を行う出家集団の誕生を意味した^①。以上を前提に、「苦行」の釈迦像を宋式儀礼と関連づけて考えてみた。

まず、「釈迦十六羅漢図」（図）を紹介しよう。本図は、自然景のなかに、一六人の羅漢を点在させ、その中央には朱衣の釈迦を配す。羅漢の聖地・天台山てんたいざんの石橋いしきょうを渡る老羅漢や虎に乗る羅漢（下方）^②、錫杖しやくじょうに乗り飛来する羅漢（上方）のほか、坐禅ざぜんや看經かんきやう、放光する舍利塔を持つなど、羅漢たちはそれぞれに説話性を帯びているようだ。

切り立った岩山の間から出る痩せた有髭の釈迦は、梁楷りやうかい「出山釈迦」（南宋時代、東京国立博物館蔵）を想起させる。釈迦と羅漢は、普賢文殊の協侍——時に岩座に坐す場合がある——が通例で、俊苒が請来した「釈迦三尊」「十六羅漢」像も安居儀礼あんこで懸用けんようされていた^③。本画はそれとは異なる、「出山釈迦」と「十六羅漢」を一幅にまとめた珍しい作例で、近年、ボストン美術館で類例が一例（元時代）確認されている^④。

光円を発す釈迦と、釈迦に礼拝する三羅漢の存在から、「出山」

に対する否定的な要素は認められない。さらには、後述の「仏伝」や「雪山に入り、六年修道す。」(二月) 藤月八夜に、明星を觀見し、忽然と頓悟す」(元庵普寧禪師語録 卷一)と禪僧が述べるように、「出山図」は「成道」を重ねた主題と理解される。

さて、泉涌寺には、出山釈迦と同じく有髭で岩上に草を敷いて端坐する白衣の「草座釈迦」図がある。「仏伝」の「吉祥草の布施」周辺を表したもので、釈迦はこの後に「成道」にいたる(『修行本起經』卷二)。現存するのは江戸時代の作例だが像容からは、南宋時代の如来坐像(伝・羅漢坐像、大英博物館蔵)や伝「阿弥陀淨土図」(京都・金蓮寺蔵)の有髭如来坐像のような大陸由来の粉本が想定可能で、図像的淵源は先のシクリ出土などの「苦行の釈迦」に求められよう。禪僧語録の「観音が吉祥草に坐す」像



「釈迦十六羅漢図」13世紀(南宋末)元初頃、絹本着色、縦108・9cm、横52・1cm

の題名が「常思惟」であること(『西巖和尚語録』卷下)を参照すれば、「成道」直後から「梵天勸請」までの数日の禪定の姿を表すのかもしれない。あわせて、元時代の江南律院で興行の「如来成道」法要(『律苑事規』卷五)での偈頌も鑑みれば、こうした「出山」「草座」の有髭釈迦像が「成道」を表象すると理解されよう。「成道」イメージを踏まえれば、両像は南宋諸寺院で催された三仏忌(誕生、涅槃、成道)儀礼中の、成道会(二月八日)本尊にふさわしい主題となる。

一方、九〇日間門外不出で修行する安居期間を終えて行う自恣は、僧が安居中の反省をし、罪を告白懺悔する儀礼で、これにより僧団は清浄となり、僧はその状態で寺を出て教化や修行活動が許される。毎年繰り返される安居自恣は、僧侶の清浄性を維持する極めて重要な宗教儀礼である。その自恣では、「草座」そのものが重要な仏具となり、僧は草座や草座聖僧像に対して偏袒右肩で胡跪合掌などをする(道宣『四分律行事鈔』「自恣宗要篇第十二」、泉涌寺蔵『南山北義見聞私記』卷下ほか)。明記されないが、「草座釈迦」は自恣儀礼でも懸用可能な主題と理解されよう。

以上、泉涌寺蔵「釈迦十六羅漢図」「草座釈迦」を手がかりに、否定的解釈の強い「苦行」の釈迦像が、成道直後や教化の第一歩を踏み出す釈迦を含意する可能性を述べ、それらが成道会や安居自恣などの年中儀礼で懸用するにふさわしい主題であることを指摘した。じつさい、成道直後の「草座」出

山」釈迦の主題（イメージ）は、安居自恣儀礼後の清浄な姿で教化へと旅立つ僧たちの姿と重なるように思われ、こうした主題と儀礼の關係性を想定すれば、山中歩行の蘭溪道隆像（神奈川・建長寺藏）などの肖像画（頂相）^{（成す）}解釈に新たな視点をもたらしものと考ええる。

従来、禅宗を中心に鎌倉時代や室町時代に流行する釈迦や羅漢などの主題の多くは、宋元文化の主たる担い手である禅僧の唐物愛好とみなされた。確かに、こうした一面は世俗社会と寺院社会との接点のなかで認められる。その一方で、そもそも仏像や仏画を所蔵する寺院が、仏道修行や礼拝の（場）であるという自明の点に立ち帰ったとき、同主題の愛好や流行の背景に宋式儀礼の浸透を関連させて考えることができるようになると思われる。

- (1) 拙稿「新出資料『南山北義見聞私記』発見の意義」（『仏教学研究』七〇、二〇一四年）。
- (2) 拙稿「鎌倉時代における泉涌寺流の道場莊嚴について」（『密教図像』三三、二〇一三年）。
- (3) 小川裕充・板倉聖哲編『中国絵画総合図録』三編第二卷（東京大学出版会、二〇一四年、A66-226）。
- (4) 板倉聖哲・梁楷「出山釈迦」（東京国立博物館）をめぐる諸問題」（第六〇回国際東方学者会議「二〇一五年五月一日」発表レジュメ）。
- (5) 中国での事例は見受けられないが、室町時代の禅院の成道会で「出山像」が懸用されている（尾崎正善「三仏忌考（二）」『宗学研究』四七、二〇〇五年）。
- (6) 高橋真作「蘭溪道隆像について」（『北条時頼とその時代』鎌倉国宝館、二〇一三年）。

— MEMO —

泉涌寺宝物館「心照殿」

〒605 0977 京都市東山区泉涌寺山内町27

総本山 御寺 泉涌寺内

TEL 075-561-1551（代表）

ホームページ <http://www.mitera.org/shinsyou/>

・開館時間 午前9時から午後5時まで

冬期（12月～2月）は4時30分まで（入館は4時30分まで）

（入館は4時まで）

・休館日 第4月曜日、元日、成人の日

・観 覧 泉涌寺入山料で宝物館はご覧いただけます。
（大人500円、中学生以下は300円）

泉涌寺宝物館「心照殿」は、泉涌寺に伝わる彫刻、絵画、工芸、古文書、典籍（聖教）の管理、調査研究、公開のために、平成一六年（二〇〇四）に開館しました。

また、泉涌寺は、歴代天皇の葬送儀礼を行い、かつては寺内で陵墓を管理する「皇室の菩提寺」として知られており、数多くの皇室の調度品や書状をはじめ、歴代天皇の肖像画、葬送記録なども所蔵しております。

心照殿は二つの展示室で構成され、企画に応じてこうした文化財を展示しております。現在は、左記展覧会を開催中です。

第一展示室 「塔頭新善光寺の寺宝と祈り」（10月25日（日）まで）
第二展示室 「泉涌寺修正会―宋式金光明懺法の世界―」（9月27日（日）まで）

右展覧会の詳細、次回以降の展覧会は、適時ホームページでご案内いたしますので、ご参照ください。

書評・紹介一覧 4～6月掲載分		※(評)…書評 (紹)…紹介 (記)…記事 [敬称略]	
碇の文化史	中近世農業史の再解釈		
(記)『日本経済新聞』5/6	(評)『社会経済史学』Vol.81, No.1(徳永光俊)		
牛と農村の近代史	中国南北朝隋唐陶俑の研究		
(紹)『地方史研究』375号(坂口正彦)	(紹)『陶説』747号(後藤修)		
怨霊・怪異・伊勢神宮	中世寺院社会と民衆		
『宗教研究』89巻1号(米井輝圭)	(紹)『京都部落問題研究資料センター通信』39号		
近世京都近郊の村と百姓	(矢野治世美)		
(評)『日本歴史』804号(田中淳一郎)	日本中世の環境と村落		
近代古墳保存行政の研究	(紹)『滋賀報知新聞』5/7		
(評)『日本歴史』803号(外池昇)	日本中世の領主一揆		
近代日本〈陳列所〉研究	(評)『ヒストリア』249号(高木純一)		
(記)『日本経済新聞』4/13	幕末・維新の西洋兵学と近代軍制		
(紹)『週刊読書人』6/12(馬場美佳)	(記)『毎日新聞』下関版4/1		
近代日本の都市社会政策とマイノリティ	(紹)『歴史読本』60巻4号		
(紹)『京都部落問題研究資料センター通信』39号	幕末期の老中と情報		
(田中和男)	(評)『洋学史研究』32号(松本英治)		
近代の「美術」と茶の湯	風俗絵画の文化学Ⅲ		
(紹)『陶説』第746号(小野公久)	(紹)『日本古書通信』80巻4号		
軍医森鷗外のドイツ留学	室町幕府の東国政策		
(紹)『日医ニュース』4/5	(紹)『地方史研究』374号(浜口誠至)		
古代日本の衣服と交通	琳派 響きあう美		
(評)『日本史研究』633号(佐藤早紀子)	(紹)『月刊美術』No.476		
(紹)『地方史研究』375号(永井瑞枝)	(紹)『産経新聞』4/26		
在京大名細川京兆家の政治史的研究	(記)『読売新聞』京都版5/20		
(評)『日本歴史』804号(古野貢)	(記)『朝日新聞』京都版6/10		
大徳寺伝来五百羅漢図	(記)『毎日新聞』京都版6/14		
(評)『美術フォーラム21』vol.31(大原嘉豊)	老農・中井太一郎と農民たちの近代		
茶の湯 恩籟抄	(評)『日本史研究』633号(勝部真人)		
(紹)『茶道雑誌』4月号	(評)『社会経済史学』Vol.81, No.1(徳永光俊)		

4月から6月にかけて刊行した図書

図 書 名	著 者 名	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
アーツ・アンド・クラフツと日本(2刷)	デザイン史フォーラム編	1207-1 C1013	2,900	4
器を楽しむ	逸翁美術館編	1807-3 C1076	1,000	4
大坂蔵屋敷の建築史的研究	植松清志編著	1724-3 C3021	4,800	4
中世アーカイブズ学序説	上島有著	1542-3 C3021	13,000	4
前野良沢	鳥井裕美子著	1786-1 C1023	2,500	4
セザンヌと鉄斎	山岸恒雄著	1796-0 C3071	2,800	5
近世日本の銅と大坂銅商人	今井典子著	1805-9 C3021	7,500	5
くずし字辞典(6刷)	東京手紙の会編	1024-4 C0521	6,000	5
茶と室内デザイン	小泉和子編	1808-0 C1070	3,500	6
正倉院宝物と古代の技	木村法光著	1809-7 C3072	15,000	6

4月から6月にかけて刊行した継続図書

シ リ ーズ 名	配本回数	巻数	巻タイトル	ISBN978-4-7842	本体価格	発行月
東京国立博物館古典籍叢刊	4	4	九条家本延喜式(四)	1767-0 C3321	15,000	4
顕岑院本	3	3	茶湯百亭百会	1793-9 C3076	20,000	4
花園院宸記	24	32・35	24回配本(最終回)	1810-3 C3321	390,000	5
大手前大学比較文化研究叢書	11	11	日仏マンガの交流	1802-8 C3090	2,800	6

(表示価格は税別)

▼最近の昔話の筋や結末が、残酷性が取り除かれたものになっていると耳にしました。
「昔話」「伝説」「神話」。それぞれが時代とともに変化する中で、そのつながりを見つめる新刊『神話・伝承学への招待』。魅力ある世界へのご招待です。(一)

☆フェア情報

東京大学生協駒場書籍部(東京都目黒区)

歴史書懇話会フェア

「戦争を読む・平和を読む／戦後70年」

第1期…6月15日～7月31日

第2期…8月6日～9月30日

左記書店にて歴史書懇話会ミニフェアを開催中です。

- ・TENDO八文字屋 (山形県天童市)
- ・紀伊國屋書店新潟店 (新潟県新潟市)
- ・今井書店グループセンター店 (島根県松江市)
- ・芳林堂書店高田馬場店 (東京都新宿区)
- ・ジュンク堂書店三宮駅前店 (兵庫県神戸市)
- ・喜久屋書店阿倍野店 (大阪市阿倍野区)
- ・ジュンク堂書店上本町店 (大阪市天王寺区)
- ・今井書店出雲店 (島根県出雲市)
- ・ジュンク堂書店ロフト名古屋店 (名古屋市中)

▼パイプコレクションを見せただきながらのお話しは、まさに世界喫煙史の旅そのものでした。出していただいた、コーヒー、お菓子、肉まん！にもそれぞれ、交友関係の広さを物語る逸話が。楽しいひとときでした。(h)

▼四条通は車線を減らし歩道を拡げる工事中。振り返れば京都の街並みは、時代とともに姿を変えてきました(巻頭広告の「二著参照」)。変化する

の、ベコンエッグ銅焼。増税後も、たぶんまだ二百円。京都以外の地域にもありますでしょう。(大)

▼去年、近所の花屋さんで購入したクチナシの鉢。この季節を楽しみに一年間育ててきたのに、今年つけた花芽はたったの一つ。残念…。(Q)

▼梅雨に入り紫陽花の季節となりました。この時期の花は雨の日でも綺麗です。散歩いくと普段とは違う場所にいる感じがします。(m)

▼今年4月に下鴨神社、10月に上賀茂神社で式年遷宮が斎行されます。わがグループ社屋も遷宮(移転ではなく改装)いたします。(江)

▼表紙図版…ロンドンのタバコ屋 (Bratwurst Smoking Age 1617より)『世界喫煙伝播史』より)

■定期購読のご案内■

『鴨東通信』は年4回(4・7・9・12月)刊行しております。

代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛お申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

おうとうふうしん

鴨東通信 四季報 No.98

2015(平成27)年7月10日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-751-1781

fax 075-752-0723

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

http://www.shibunkaku.co.jp

表紙デザイン 鷺草デザイン事務所

日本古代国家の 農民規範と地域社会

坂江渉著

【8月刊行予定】

古代の過酷な生活環境のなかで、社会の維持や人口の再生産はいかになされたのか。

「農民規範」と「浮浪人」をキーワードに国家が地域社会に期待した農民像、さらには律令国家の社会統治原理を明らかにする。その一方、風土記や記紀にみえる神話や伝承、民間歌謡を素材として村落における農民結合のあり方、族長層と農民との支配・庇護関係を論じ、国家と地域社会の関係を双方の視点から分析する。また古代の国際交通を視野に入れることで、大陸諸国との諸関係の中で日本古代国家の特質を解明する。

◎ 第1部 日本古代国家の農民規範と浮浪人 ◎

日本古代の力田について／律令国家の農民規範と浮浪・逃亡／律令国家の社会編成の転換と浮浪人認識「不論土浪」策の登場

◎ 第2部 古代の共同体と地域社会 ◎

古代女性の婚姻規範／美女伝承と歌垣／人を取り巻く自然・社会環境と古代の共同体／「国占め」神話の歴史的前提／古代の食膳と勸農儀礼

◎ 第3部 古代の水陸交通と境界の呪術・祭祀 ◎

古代国家とミナトの神祭り／古代国家と敏売崎の外交儀礼／「播磨国風土記」からみる地域間交通と祭祀／出雲国と王権との関連で

▼ A5判・四五〇頁／本体九、〇〇〇円

さかえ・わたる：一九五九年大阪府生、一九八二年滋賀大学経済学部卒業、一九八四年神戸大学文学部卒業、一九九二年神戸大学大学院（博士課程）文化科学研究科単位取得満期退学。博士（文学）。現在、兵庫県立歴史博物館・研究コーディネーター。

古代日本の衣服と交通

武田佐知子著

装う王権 つなぐ道

衣服と交通、そしてそこから派生する境界・王権・民族標識・異性装などの諸問題……。大阪大学を退職した著者による長年の研究成果を集成。

▼ A5判・四二〇頁／本体六、八〇〇円

日本古代文書研究

渡辺滋著

古代社会における文書の機能に関する最新の研究成果を提示するとともに、符・序宣・下文など、機能論的な視角によって文書主義の運用を考察。

▼ A5判・四八〇頁／本体九、二〇〇円

平安時代貿易管理制度史の研究

渡邊誠著

9世紀以降の対外貿易は朝鮮・中国からの海商に担われてきた。本書は海商の貿易活動を国家が管理する「制度」の中心にすえ、その消長を明かす。

▼ A5判・三九六頁／本体七、〇〇〇円

日本古代養鷹の研究

秋吉正博著

朝鮮半島系と中国系という二極の放鷹文化の伝統意識を動態的に捉えることにより、律令体制期の放鷹文化の構造と展開を解明した意欲作。

▼ A5判・二八〇頁／本体六、五〇〇円

紀伊古代史研究

栄原永遠男著

紀国造と名門貴族である紀朝臣の考察と倭政権との関係、8〜9世紀の紀伊に関する経済・文化を論じ、さらに古文書研究を収録。

▼ A5判・四三〇頁／本体七、五〇〇円

日本音楽史料叢刊 刊行!

カラー影印・図版

日本音楽史学の中核的拠点、上野学園大学 日本音楽史研究所創設以来40年にわたる研究の蓄積と成果を踏まえた叢刊。同分野の研究に必須の史料を厳選。史学・美術・文学研究にも新たな史料を提供する。

日本音楽史料叢刊1

陽明文庫蔵 舞絵〔舞楽散楽図〕・ 法隆寺旧蔵 拺鼓

上野学園大学 日本音楽史研究所 編
執筆 福島和夫(上野学園大学 日本音楽史研究所)
藤原重雄(東京大学史料編纂所)

舞絵〔舞楽散楽図〕

陽明文庫蔵本は美術史にまだ知られぬ優品。唐代舞楽・散楽の白描画。原本は唐代に成立し、日本に将来されたと推定される。陽明文庫蔵本が現存諸本中の祖本。

拺鼓(かいこ)

康治二年(一一四四)墨銘の法隆寺旧蔵拺鼓は、世界唯一の伝存楽器。西域より中国を経て日本に将来された。指でこすって音を出す特殊な奏法で知られる。

〔内容〕

図版篇
陽明文庫蔵 舞絵〔舞楽散楽図〕(全頁カラー影印)
論考篇

〔舞楽散楽図〕

日本中世の図譜的な舞楽図について

〔舞楽散楽図〕と宗達屏風の狭間

法隆寺旧蔵 拺鼓

福島和夫

藤原重雄

福島和夫

〔8月刊行予定〕

高久国際奨学財団研究助成事業
▼A4判横本・一三〇頁/本体二、七〇〇円

天皇・將軍・地下樂人の

三島曉子著

室町音楽史

天皇・將軍家の笙の御師範として重要な役割を果たした地下樂人豊原氏の南北朝から約一五〇年にわたる活動に着目し、公・武・樂家という三者の関わりから、音の文化を論じる。▼A5判・三六〇頁/本体六、六〇〇円

訓讀註釋 儀式踐祚大嘗祭儀

皇學館大学神道研究所編

皇學館大学神道研究所が長年に亘り取り組んできた、現存本の訓読・注釈研究の成果。▼B5判・八九〇頁/本体一五、〇〇〇円

正倉院宝物と古代の技

木村法光著

長年、正倉院事務所保存課に勤務し、正倉院宝物の調査・研究、保存・管理に携わってきた著者の研究成果を一書にまとめる。

〔7月刊行〕

▼A5判・五二二頁/本体一五、〇〇〇円

正倉院染織品の研究

尾形充彦著

宮内庁正倉院事務所で研究職技官として、一貫して染織品の整理・調査・研究に従事してきた著者による、35年にわたる研究成果

▼B5判・四一六頁/本体二〇、〇〇〇円

碇の文化史

石原涉著

先史の時代から石や木で作られた碇が、鉄の錨(いかり)へと移り変わっていくまでの形態上の変化と発展の系譜をたどる。

〔4月刊行〕

▼A5判・三三二頁/本体五、八〇〇円

佛教大学研究叢書

神話・伝承学への招待

斎藤英喜(佛教学大学院史学部教授 編)

【9月刊行予定】

桃太郎は、なぜ桃から生まれてくるのだろうか——その答えは『古事記』のなかにあった。これまで別々のジャンルの扱われてきた「神話」と「伝説」「昔話」について、総合的・学問的に研究する「神話・伝承学」。本書は11の章と7つのコラムにより、魅力ある「神話・伝承学」の世界へいざなう、格好の入門書。

『予定内容』

- 第一章 「神話・伝承学」とはなにか
- 第二章 「古事記」、神々の世界を読む
- 第三章 日本神話とシャーマニズム
- 第四章 もうひとつの「古代神話」 沖縄・台湾
- 第五章 神仏習合と中世神話
- 第六章 スサノヲの変貌と「韓国神話」
- 第七章 仏教と神々―八幡神を中心に―
- 第八章 妖怪譚―土佐の河童伝承を事例として―
- 第九章 神話・伝説・昔話への新しい視点
- 第十章 ギリシア神話を学ぶ
- 第十一章 「古事記」はいかに読まれてきたか

●コラム●

アニメ・漫画と神話―『蟲師』(プレモセリ・ジョルジョ)／絵本や教科書に描かれた古事記神話―『児童向け古事記』の歴史(谷本由美)／祇園祭と牛頭天王(鈴木耕太郎)／ヤマトタケルの変貌―「家族の神話」としてのヤマトタケル(稲生知子)／「日本霊異記」と昔話(井熊勇介)／「偽史」が創り出す民俗―「東日流外三郡誌」を中心に(星優也)／聖地巡礼の系譜(花川真子)

▼A5判・二六〇頁／本体二、三〇〇円

増補 陰陽道の神々

斎藤英喜著

佛教学院鷹陵文化叢書17

知られざる陰陽道の神々の来歴と素顔を平易に説く。コロンビア大学での発表を元にした論考「牛頭天王の変貌と「いざなぎ流」を収録して増補再版。

▼四六判・三五六頁／本体二、三〇〇円

平安時代陰陽道史研究

山下克明著

平安時代を中心に、宗教としての陰陽道のあり方、陰陽師たちの天文観測技術や呪術・祭祀など活動の実態とその浸透、彼らの信仰などをさまざまな角度から明かす。

▼A5判・四六〇頁／本体八、五〇〇円

日本古代の伝承と歴史

渡里恒信著

王権と氏族の諸様相を『古事記』『日本書紀』等の伝承史料から解き明かした論考に加え、平安初期の特徴的な君臣関係をテーマとした論文を収録。

▼A5判・三七二頁／本体六、〇〇〇円

怨霊・怪異・伊勢神宮

山田雄司著

早良親王・菅原道真・崇徳院などの怨霊や、様々に記録・伝承される怪異など、その諸相を歴史的に跡づけ、神仏の領域をも射程に入れて集大成する。

▼A5判・四四八頁／本体七、〇〇〇円

太子信仰と天神信仰

武田佐知子編

信仰と表現の位相

聖徳太子信仰・天神信仰の比較研究。各専門分野の研究者による、両信仰に関わる美術史、文学史、宗教史、芸能史的研究を集成し、それぞれの信仰の進化形について明かす。

▼A5判・三四四頁／本体六、五〇〇円

日記・古記録の世界

倉本一宏編

日記とは何か、古記録とは何か、それらを記録することの意味、記主や伝来をめぐる諸問題、さらには古代・中世における使われ方など、単に日記・古記録を利用するだけにとどまらない意欲作35論考を収録。国際日本文化研究センターでの共同研究の成果。



目次

第I部 日記・古記録の本質	第IV部 日記・古記録の伝来
「日記および「日記文学」概念史大略」「日記」という文獻／茶会記の成立／日記と日記文学／日記と僧伝の間	かへりきける阿倍仲麻呂／『御堂関白記』古写本の書写態度／「小右記」と「左経記」の記載方法と保存形態／公家史料の申沙汰記／真言門跡寺院における文書と日記／西宮事件
第II部 日記・古記録を記すについて	第V部 日記・古記録の使われ方
具注暦と日記／古記録の裏書について／日記から歴史物語へ／記す祭と記さない祭／藤原行成が「権記」に記した秘事／近世琉球における日記の作法	渡海日記と文書の引載／平安貴族による日記利用の諸形態／藤原行成「権記」と「新撰年中行事」／「明月記」の写本学研究
第III部 日記・古記録の記主をめぐる	第VI部 日記・古記録を素材として
宇多天皇の文体／日記における記主の官職名表記についての検討／日記の亡佚に関する一考察／記事の筆録態度にみる記主の意識／日記を書く天皇／一人称形式かな日記の成立をめぐる「台記」に見る藤原頼長のセクシュアリティの再検討	国司苛政上訴考／「宮中御機法講繪巻」(三院所蔵)の再検討／日記逸文から読み取れること／一条天皇と祥瑞／検非違使官人の日記／ペリーがくるまでは、やはり鎖国である。

【4月刊行】

▼A5判・七九二頁／本体二二、五〇〇円

禁裏・公家文庫研究 既刊5冊

田島公編

これまで勅封のため全容が不明であった東山御文庫本を中心に、近世の禁裏文庫所蔵の写本や、公家の諸文庫収蔵本に関する論考・史料紹介・データペー

▼B5判・総二二七八頁／既刊揃本体五二、六〇〇円

御堂関白記全註釈 全16冊

山中裕編

平安時代を代表する一級史料、藤原定長の日記「御堂関白記」の原文・読み下しと詳細な註により構成するシリーズ。

▼A5判・総四〇四六頁／揃本体一〇七、〇〇〇円

禁裏本歌書の蔵書史的研究

酒井茂幸著

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、同時代の公家日記や古歌書目録類を援用しつつその伝来の歴史を跡付ける。また、禁裏における歌学や古典文学の注釈・講釈に注目し、古典学の変遷を叙述する。中世後期以降、歴代天皇がどのような歌書を求め、書写し、収蔵していったかを明らかにする。

▼A5判・三四四頁／本体五、六〇〇円

中世アーカイブズ学序説

上島有著

文書を文献資料としてのみでなく「もの」として捉え、その総体を研究対象としてきた著者が、永年の研究成果を「アーカイブズ学序説」としてまとめる。

▼B5判・四二八頁／本体一三、〇〇〇円

中世の契約社会と文書

村石正行著

売買・貸借などの契約関係を題材に、それに関わる契約者双方の文書作成のあり方を検証、「塵芥集」における法慣習なども援用しながら、双方方向の文書授受とそれにつながる文書作成が一般的におこなわれていた可能性を示す。

▼A5判・三五二頁／本体七、五〇〇円

西山地蔵院文書

早島大祐編

京都市史料叢書6
〔9月刊行予定〕

西山地蔵院は応安元年（一三八八）に細川頼之が京都西郊の地に創建し、碧潭周岐を事実上の開基とした禪宗寺院である。

現在、京都大学総合博物館が所蔵する西山地蔵院文書は、創建当初から戦国時代までの文書を残し、守護が創建した京菩提寺に関する基本史料として位置づけられるとともに、室町期の荘園制や都鄙交通を考える際に注目されてきた禅僧や守護奉行人の活動が具体的にわかる社会経済史上の重要史料である。

影印・翻刻に、解説を加え、「西山地蔵院文書編年目録」を付記。

▼A5判（横綴）・四二〇頁／本体一三、〇〇〇円

〔内容〕	
I	影印編
II	翻刻編
III	解説編「西山地蔵院領の形成と展開」（早島大祐）
西山地蔵院文書編年目録	

日本中世の環境と村落

橋本道範著

第一部では、中世琵琶湖漁撈と首都京都での消費という問題を中心に、中世村落についての「水辺」における漁撈の歴史の意義を問い、第二部では、他地域の検討もふまえ、十三世紀を画期として、小さなムラが精緻な地域資源利用の主導権を握るとする「生業の稠密化」論を提起し、従来の集約化論や集村化論を止揚する。

▼A5判・四四四頁／本体八、四〇〇円



中世寺院社会と民衆

下坂守著

衆徒と馬借・神人・河原者

中世比叡山延暦寺が果たした歴史的役割を、同寺の活動実態とその支配下にあった京・近江の民衆との関係を中心に考察。中世寺院社会の具体像に光を当てる一書。

▼A5判・四三二頁／本体七、五〇〇円

日本中世の地域社会と仏教

湯之上隆著

静岡県を中心とした地域の寺社文書の詳細紹介、紀行文から見る地域社会など、「宗教」と「地域社会」をキーワードとして古代から近代までの社会を概観する論集。

▼A5判・三八四頁／本体八、〇〇〇円

日本中世の領主一揆

吳座勇一著

本書は〈領主の一揆〉研究の蓄積の上に、〈領主の一揆〉の構造・機能・結合論理を解明し、新しい国人一揆論を提示しようとするものである。

▼A5判・三八〇頁／本体七、二〇〇円

祇園祭の中世

河内将芳著

祇園会の見物という行為の検討により、その特質をうきほりにし、さらに神輿渡御の神幸路・御旅所と都市空間との関係、戦国期の祇園祭の再興の意味等について解き明かす。

▼A5判・三六〇頁／本体四、五〇〇円

天龍寺文書の研究

原田正俊編

仏教史・寺院史のみならず、政治史・社会経済史研究に必須の文書群。鎌倉時代・慶長五年の中世天龍寺関係文書・関連諸塔頭文書を翻刻・掲載。研究編として解説・論考を収録。

▼A5判・七一六頁／本体一四、〇〇〇円

近世日本の銅と大坂銅商人

今井典子著

〔5月刊行〕

本書は、銅の最大市場である大坂の銅商人社会が成立・変容する過程を軸にして、銅の生産・流通の歴史を通覧。住友家文書や初村家文書など関連史料を丁寧に読み解き、長崎貿易の動向・幕府の統制・相場の変動なども視野に入れながら論じた本邦初の銅の近世通史である。

第一章 大坂銅商人社会の成立と変容

大坂銅商人一覽／「銅吹屋の時代」から「銅仲買と真鍮屋の時代」への移行／棹銅の製造法・南蛮吹の効用と銅吹屋／銅吹屋仲間一

七人の変容／真鍮産業の発展

第二章 大坂銅商人の長崎銅貿易

定高制／銅代物替／運上付き請負い／

元禄銅座／銅吹屋仲間の長崎廻銅請負い

第三章 長崎会所の銅貿易と大坂銅商人

御割合御用銅／第一次長崎直買入れ／元

内容

文銅座の設置と荒銅買上げ方法／長崎会

所と幕府御金蔵／第二次長崎直買入れと

その後

第四章 地壳銅と鉛鋳業

近世の地壳銅／近世の鉛鋳業

第五章 元文銅座と大坂銅商人

元文銅座の鑄銭／元文銅座後半の諸問題／元文銅座の勘定帳

第六章 明和銅座と大坂銅商人

明和銅座の設置と銅の総体的統制／明和銅座の地壳銅統制／古銅の統制／明和銅座の財政／専売制の継続と御用銅の廃止

▼A5判・三一六頁／本体七、五〇〇円



いまい・のりこ：一九四二年京都市生。もと住友史料館研究員。

大坂蔵屋敷の建築史的研究

植松清志編著

大名や旗本などの領主が、貢租米や特産品の販売・貯蔵のために設置した蔵屋敷について、建築史的観点から研究。史料篇に絵図のトレス図面を掲載。

〔4月刊行〕

▼B5判・二二六頁／本体四、八〇〇円

近世の公家社会と京都

登谷伸宏著

集住のかたちと都市社会

公家町の形成・変容過程の解明を通じて、近世京都の都市空間の特質を明かし、あわせて近世京都の都市社会構造を論じる。

〔4月刊行〕

▼A5判・三九二頁／本体八、〇〇〇円

近世の禁裏と都市空間

岸泰子著

禁裏に関する信仰や儀礼の場・空間の特性に注目。都市・建築史学のみならず近世京都の都市空間の特徴を多角的な視点から包括的に論究。

▼A5判・三二〇頁／本体六、四〇〇円

住友の歴史 全2冊

朝尾直弘監修／住友史料館編

近世初頭から銅の精錬を業とし、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の典型である住友の歴史をわかりやすく紹介。

▼四六判・上二八六頁下三二二頁／本体各一、七〇〇円

住友史料叢書 既刊29冊

小葉田淳・朝尾直弘監修／住友史料館編

住友史料館に収蔵する鉱業史料は、質・量ともにわが国屈指の基本史料。一万数千点にのぼる近世史料のうち重要でかつ継続する記録類を中心に編纂。

▼A5判・平均四〇〇頁／既刊揃本体二六六、五〇〇円

角倉一族とその時代

森洋久（国際日本文化研究センター准教授）編

〔7月刊行〕

近世の文化・技術の総体の中で角倉一族の業績を俯瞰的に検討。

第一部 吉田・角倉家の系譜

角倉了以・素庵の人物像〔若松正志〕／土倉としての角倉〔河内将芳〕／角倉家と公家・武家・寺社との関係〔同上〕／幕府上方支配における幕臣・京角倉家と嵯峨角倉家〔菅良樹〕

第二部 吉田家の医業

近江の吉田家と京都進出に関する仮説〔奥澤康正〕／医家吉田家の家系図と人物像〔同上〕／患者としての角倉了以と素庵・光由の病〔同上〕ほか

第三部 社会基盤と角倉

〔土木技術〕高瀬川〔福本和正〕／資料紹介・高瀬川の発掘調査成果〔鈴木久男〕／菖蒲谷池隧道〔福本和正〕／森幸安の地誌・地図に記された角倉関連情報〔辻垣晃一〕／穴太衆積み〔栗田純司〕／洛西・嵯峨野の庭園とその技法〔金久孝宣〕

〔水運〕保津川下り船頭の操船技術と精神〔豊田知八〕／保津川下り〔上林ひろえ〕／嵯峨嵐山の薪炭商小山家について〔鈴木久男〕／富士川舟運について〔石川武男〕／近世オランダにおける水運事業と測量〔中澤聡〕／御土居敷と角倉号一〔中村武生〕

第四部 海外貿易と船の技術

清水寺の角倉船絵馬〔坂井輝久〕／角倉家と朱印船貿易〔佐久間貴土〕／了以・素庵父子の生涯〔葉山美知子〕／朱印船時代における「日本前」船と南シナ海の造船事情〔金子務〕

第五部 算術

『塵劫記』から和算へ〔小寺裕〕／吉田光由と続く算学者〔鳴海風〕／近世の暦と天文学〔小林龍彦〕／西洋数学と和算〔森洋久〕

第六部 嵯峨本と古活字

嵯峨本の特徴と魅力について〔林進〕／嵯峨本の世界〔高木浩明〕／嵯峨本 謡本〔伊海孝充〕／『嵯峨本』以前の古活字版について〔森上修〕

▼A5判・六二八頁／本体八、八〇〇円

京都 高瀬川

角倉了以・素庵の遺産

石田孝喜著

角倉了以・素庵父子によって開削された洛中と伏見港を結ぶ運河、高瀬川。開削の歴史から舟入や橋の変遷など、歴史と文化を多方面から描く。図版多数。

▼A5判・二五〇頁／本体二、二〇〇円

京都の歴史災害

吉越昭久・片平博文編

京都を襲った災害について地理情報システム（GIS）などによる災害範囲や規模の復原、特徴や被害の社会的背景の分析、取組み等を多分野から論じる。

▼A5判・三二二頁／本体二、三〇〇円

緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く

緒方洪庵記念財団・除痘館記念資料室編

緒方洪庵らが開き、天然痘予防の普及活動の拠点となった大阪の「除痘館」活動の記録「除痘館記録」の原本図版・翻刻・現代語訳・註・解説と論考。

▼A5判・二二〇頁／本体二、三〇〇円

前野良沢

生涯一日のごとく

鳥井裕美子著

解体新書の訳者として知られる江戸時代の蘭学者・前野良沢の生涯を、著書や周辺資料から再検討し、新たな良沢像を構築。口絵写真・年譜等を付す。

▼B6判・三三四頁／本体二、五〇〇円

識字と学びの社会史

大戸安弘・八鍬友広編

日本におけるリテラシーの諸相 近代学校制度が導入されるまでの日本における識字と学びの歴史とその諸相を、様々な史料から多面的に掘り起こし検討を試みる教育史研究者の論集。

▼A5判・三七二頁／本体七、〇〇〇円

***** 内 容 *****

徳川社会と

日本の近代化

〔4月刊行〕

▼A5判・七三〇頁／本体九、八〇〇円

19世紀、日本が植民地化の途を歩まず独立を堅持した理由として徳川日本の文明史的力量に着目し、多分野の研究者の書き下ろし論文25本により総合的に究明する。

序論 徳川時代通史要綱〔笠谷和比古〕

I 政治 新井白石と政治〔大川真 徳川吉宗の武芸上覧〔横山輝樹〕— 19世紀の藩政情報〔磯田道史〕 会津戊辰戦争の戦後処理問題をめぐる一考察〔岩下哲典〕

II 思想 長州藩明倫館の藩校教育の展開〔前田勉〕 日本儒学における考証学的伝統と原典批判〔竹村英二〕 本多利明の北方開発政策論〔宮田純〕 幕末から明治、後期水戸学「影」の具現者〔上村敏文〕

III 文化 藩校における楽の実践〔武内恵美子〕 大武鑑〔大名付〕と板元と大名家〔藤實久美子〕 宝水地震と近松の浄瑠璃〔原道生〕『道の幸』『諸国風俗問状巻』からみた松平定信の文化政策の背景〔森田登代子〕 東北農村における結婚パターンの変容〔平井晶子〕 19世紀における剣術の展開とその社会的意味〔魚住孝至〕

IV 科学 中根元圭と三角法〔小林龍彦〕 高松松平家博物図譜の成立〔松岡明子〕 蘭書による西洋天文学の受容の始まり〔和田光俊〕 江戸後期幕府・諸藩の近代化努力と大砲技術〔郡司健〕

V 国際 オランダ商館長と将軍謁見〔フレデリック・クレインス〕 一七—一九世紀における日本の朝鮮史認識形成の特色〔平木實〕 清朝考証学の再考のために〔伊東貴之〕 兼葭堂が紡ぎ、金正喜が結んだ夢〔高橋博巳〕 幕末最終章の外交儀礼〔佐野真由子〕 神戸開港に臨んだ外国奉行柴田剛中〔菅良樹〕

一八世紀日本の文化状況と国際環境

笠谷和比古編

18世紀の日本の文化的状況はいかに形成され、国際的な影響をいかに受けた独自の展開を示したか。国際日本文化研究センターの共同研究成果23篇。

▼A5判・五八二頁／本体八、五〇〇円

近世の王権と仏教

大桑斉著

家康の將軍権力成立から綱吉期までを中心に、近世国家・社会の神聖性・宗教性を論証。更に救済信仰という様相をもつ真宗に着目した諸論考も収める。

▼A5判・三四〇頁／本体六、五〇〇円

天下人の神格化と天皇

野村玄著

秀吉や家康の神格化が、なぜ近世前期の政治過程において要請され、どのように実現したのかを解明し、そこでの天皇・朝廷の行動と意味を再検討。

▼A5判・三八四頁／本体七、〇〇〇円

幕藩政アーカイブズの総合的研究

国文学研究資料館編

幕政・藩政文書の管理・伝束について具体的に検討し、実務者に焦点を当てることのできる文書管理の歴史に新たな知見を示す国文学研究資料館共同研究成果。

▼A5判・五〇四頁／本体八、五〇〇円

幕末・維新の西洋兵学と近代軍制

竹本知行著

近代国家と国民形成の推進に大きな役割を果たした軍隊創設の軌跡を、大村益次郎とその遺志をついだ山田顕義らの動向に辿り、政治上上の特性を探る。

▼A5判・三四〇頁／本体六、三〇〇円

【8月刊行予定】

本書は、一九世紀フランス象徴主義の巨匠・詩人ステファヌ・マラルメ（一八四二—一九〇八）について文学的考察を起点に進められた諸芸術・音楽の相關的研究から、明治近代化の黎明期に、日本の術統芸術文化を欧米に紹介してその価値を究めたアーネスト・フェノロサ（一八五三—一九〇八）との関係へと至るものであり、東西の芸術文化の交流の諸相および日本文化の価値を、現代に向けて照らし出すものである。著者の一〇年にわたるマラルメ探究の成果、そのエッセンスをまとめた一書。

1 マラルメの無

- 2 俳句とハイカイ
3 主体の表現
4 バルト再考

1 中枢としての音楽

- 2 世紀末芸術の錯綜
3 ロダンが結ぶ社会と芸術

1 マラルメの「骰子一擲」

- 2 マチスの「余白」
3 詩と絵と書における「空無」
4 魁夷が紡ぐ東西芸術

1 九鬼周造とフランス象徴主義

- 2 フェノロサの総合芸術観
3 フェノロサ『漢字考』と「能楽論」の文芸価値

▼A5判・三九〇頁／本体五、四〇〇円

むなかた・きぬこ：神戸松蔭女子学院大学文学部教授

日仏マンガの交流

—ヒストリー・アダプテーション・クリエーション

大手前大學比較文化研究叢書 11

石毛弓・柏木隆雄・小林宣之編

【7月刊行】

大手前大学で行われた日仏文化交流シンポジウムの成果。

日仏両国および海外のマンガ／バンド・デシネ文化について、各国の特質と相互の交流を、特徴・受容・翻訳などの視点から考察する。

まえがき

第1部 マンガの世界

—アメリカ漫画からマンガへ
物語マンガの発展
「小野耕世」

どう異なるのか

アジアにおけるマンガの特徴と現状

試論..なぜ「未来マンガ」に未来はないか

第2部 バンド・デシネー風刺から始まる

フランス漫画の原点―グランヴィル、ガヴァルニ、ドーミエ

「進化論」

『ダンタン』と『アステリックス』の日仏受容

—2つのBDにみる〈ベルギー性〉と〈ガリア主義〉

開かれた輪郭
「カトリーヌ・ムリス
反道のアポロ」

「坂道のアポロン／Kudos on the Slope」 ミンカ共同翻訳の
プロセス、可能性とその意義
関口涼子／パトリック・オノレ

第3部 マンガ―読むひと・描くひと・訳すひと

対談…《食》を描くということ―漫画家の現場から

「うえやまとち／倉田よしみ」

全体討論

▼A5判・二八六頁／本体二、八〇〇円



世界喫煙伝播史

鈴木達也著

【7月刊行予定】

前著『喫煙伝来史の研究』で従来の諸説の問題点に光りを当てた著者が、前編では新大陸からヨーロッパ、中近東、アフリカの諸地域へ伝播したタバコと喫煙について考察。これをふまえて後編では日本への伝来、アジア近隣国への伝播について、これまで定説的に扱われてきた諸説を改めて見直し、時間軸上に矛盾のない説を展開する。



予 定 内 容

前編 新大陸から旧大陸へ

ヨーロッパ・イスラム社会・アフリカへの伝播
コロンプス以前の喫煙／新大陸からヨーロッパへ／
旧大陸最初の喫煙国・イングランド／ヨーロッパの
集散・加工基地・オランダ／北欧諸国の喫煙／他の
欧州諸国への伝播／スペインへの伝播／イスラム社
会・アフリカへの伝播と水パイプ

後編 日本への伝播そして近隣アジア諸国へ

日本への喫煙伝播／タバコ・喫煙伝来マニラ（スベ
イン）説の諸問題／キセルの起源とその語源／長崎
出島のオランダ商館とパイプ／アジアの近隣諸国へ

▼A5判・五五〇頁／本体八、五〇〇円

すずき・たつや：一九三八年北海道生、上智大学外国語学
部卒業。現在、トランステクネ・インタナショナル株式
会社社長、日本パイプクラブ連盟名誉会長、国際パイプ・
クラブ委員会副会長、国際パイプ・アカデミー理事。

喫煙伝来史の研究

鈴木達也著

南蛮人により日本にもたらされたタバコ。実はその伝来時期ははっきりして
いない。外国語文献に精通する著者が、史料を駆使して従来の諸説を見直す。

▼A5判・三六〇頁／本体五、五〇〇円

近代日本〈陳列所〉研究

三宅拓也著

公共の陳列施設である〈陳列所〉が、都市の勸業目的で各地に設置された経
緯を検証し、制度・活動・建築を含めて都市との関わりに注目する。

▼A5判・六四〇頁／本体七、八〇〇円

茶と室内デザイン

小泉和子編

茶が日本住宅の室内意匠にあたえた影響について様々な論考を収録し、豊富
なカラー図版とともに、茶道と室内デザインの関係性を考える一書。

【6月刊行】

▼B5判・二二四頁／本体三、五〇〇円

第10回林屋辰三郎藝能史研究奨励賞

中世後期の香文化 香道の黎明

本間洋子著

香会と香木・薫物贈答を香文化と捉え、香道発生期の史料から実証的に解明。

▼A5判・四二六頁／本体八、二〇〇円

第25回茶道文化学術奨励賞

西鶴の文芸と茶の湯

石塚修著

井原西鶴の文芸作品・思想と、当時の茶の湯文化の影響関係を検証する。

▼A5判・三一六頁／本体六、〇〇〇円

第20回日本比較文学会賞

日中演劇交流の諸相

陳凌虹著

清末民国初期の日中演劇界の連携を、文明戯と新派の関係を中心に論証。

▼A5判・四一八頁／本体八、〇〇〇円

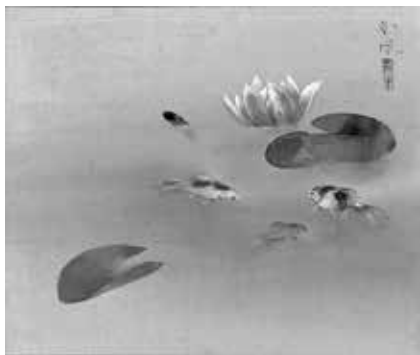
中国近代演劇の成立

——思文閣グループの逸品紹介——

美の縁

び

よすが



熊本生まれの日本画家・堅山南風は、文化勲章を受章するなど、昭和期を代表する画家のひとり。二十六歳のとき文展に出品した作品が横山大観の激賞を受け、事実上最優秀賞となる二等に入選します。以後、大観の薫陶を受け、彼が主導する院展で活躍しました。目にも涼やかな池畔を描いた本作。蓮の花びらには、白、青、桃色といった幾つかの色が置かれていますが、現実にはない情景ですが、南風の巧みな筆技によって違和感なくまとめ上げられています。葉には、琳派の画家が好んで用いた、たらし込みの技法が用いられ、金色と緑色とが混じり生まれる不思議な色調

すいれんきんぎょ

◆ 睡蓮金魚 ◆

かたやまなんふう

堅山南風

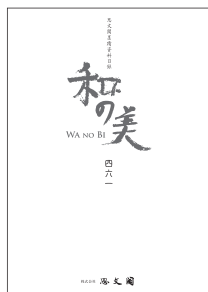
は、まるで光や水を受けて変わる見え方を表すようです。さらに、金魚に目を移すと、鯉をはじめとした魚類の描技に秀でた南風らしく、写生的な描きぶりとなっています。また、先ほどまで水面の睡蓮を見ていたはずの視点が一転し、水中からの描写であることに驚かされます。

色や形、視線を自在に構成しながら、落ち着いたすっきりとした画面となっています。水辺の風情の臨場感に満ちた夏らしい一幅です。

(思文閣営業総務部・曾根美寿)

思文閣墨蹟資料目録

和の美



古書画から
近代美術まで
毎月100点の名品を
通信販売にて
お届けします。

お電話もしくはホームページにてお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
info@shibunkaku.co.jp

思文閣古書資料目録

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年4回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。



吉田松陰野山獄文
紀往事
一巻

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
<http://www.shibunkaku.co.jp/kosho/>
kosho@shibunkaku.co.jp

スマートフォン・タブレット専用 思文閣の査定申込みアプリ



丁寧なガイダンスとカンタン操作で、査定申込みをお手伝いします。
思文閣の専門スタッフが
お手持ちの作品を丁寧に拝見、
後日査定結果をお知らせいたします。

無料配信中

「美術品査定」で検索、無料ダウンロード
Available on the App Store
ANDROID APP ON Google play

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 355
TEL(075)531-0001 FAX(075)531-5533
<http://www.shibunkaku.co.jp/>
satei@shibunkaku.co.jp



ぎやらしい思文閣では、絵画・陶芸など
様々な展覧会を開催いたします。
皆様のお越しを心よりお待ち申し上げます。

ぎやらしい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町 386
TEL(075)761-0001 gallery@shibunkaku.co.jp
www.shibunkaku.co.jp/gallery/